

書置之事

一 諸神・諸仏様あり」かたき御事、  
「上々様ありかたき御事、  
(先祖)せんそ之事大せつニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候、我等毎日大せつニ」仕候間、  
(差し障り)何之さしわりも」なく、如<sub>レ</sub>此はん上仕候事、  
(繁盛)「ありかたく奉<sub>レ</sub>存候

一 太郎兵衛方へ申置候、我等」方以後ハ、御 江戸松や町」おもて式十八間口之屋敷」之やちん之内、  
(家質)「老年ニ金子」百兩つ、十年、おしを」方へ相渡し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、おしを」方へ申置候、太郎兵衛方より」年々百兩つ、請取候金子、  
「清左衛門方へ預ケ置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、」年々百兩つ、請取候て」千兩有、是ハ清左衛門・おしを」方へ申置候、  
(夫婦)「ふうふあい能、」我等せんそを大せつニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候、我等せんそをそさうニ」  
(租相)「おもい候者、色々之(災難)さい」なん来り可<sub>レ</sub>申候、右之金子」おしをニくれ候も、せんそ之事おもい候てくれ申候、」  
(また)「又候おしを方へ申置候、」右之金子心入次第ニ、清左衛門」方方請取遣可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、  
(悪)「少も」あしき事ニハ遣被<sub>レ</sub>申間敷候、」是ハ清左衛門方へ申置候、  
「我等せんそを大せつニ」おもい候者、おしを何」ほときに入不<sub>レ</sub>申候共、  
(堪忍)「かん」にんを仕、ふうふ中能」仕、  
(添)「そい可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、此書置」候事も、せんそ之事を」おもい出し、  
(涙)「なみた計ニ而」書申候、かならずく、」此書置之通りを、  
(背)「相そ」むき被<sub>レ</sub>申間敷候、相そむ」き候者、天めいつきはて」可<sub>レ</sub>申候

一 太郎兵衛方へ申置候、我等方」以後ハ、松や丁右之屋敷、」其方一生之内ハ、心入次第ニ」可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>致候、  
其方方以後ハ、」清左衛門方へ相渡し可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、」  
(これまた)「是又せんそ之事をおもい」申置候、我等はん上仕候も、」  
(陰)「せんそ之御かけニ而候間、」  
(子孫)「しそん之事をおもい申」置候、  
少も相そむき被<sub>レ</sub>申」間敷候、  
此外何ほと書置出候共、我等手ニて書不<sub>レ</sub>申」候者、  
(用)「もちい被<sub>レ</sub>申間敷候、」諸事目出度書置候、以上

高瀬 善兵衛印

元禄十七年

申ノ三月吉日

右之書置、相」まもり可<sub>レ</sub>申候

太郎兵衛印

清左衛門印

清浄 院印

大徳 院印

右之書置、平兵衛方へ」預ケ置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>申候、以上